

No.12 口から食べる事にこだわって ～管理栄養士の立場から～

山下真有美 豊田綾子（あくなみ苑）



はじめに

健康な人にとって、「口から食べる事」は当たり前のことである。しかし、病気や障害、加齢に伴う身体の変化により、口からが当たりまえでなくなるのが、高齢者施設では起こる。この事例は、当苑で6年間過ごされたAさんについての事例を報告する。

【入所に至るまでの経緯】

平成26年4月に褥瘡で入院となったが、食事が進まなくなり胃ろう造設する。しばらくして自己抜去され、再度経口摂取に移行して口から食べられるようになる。胃瘻孔はそのままふさがり経口摂取のみとなる。平成28年4月に療養型医療施設から当苑に入所される。

事例紹介

【氏名】A氏【年齢】90代【性別】女性【介護度】5
【身長】142.0cm【体重】32.2kg【BMI】16.0
【主訴】自分で食べたい 口から食べたい
【既往歴】認知症 誤嚥性肺炎 褥瘡 慢性心不全 パーキンソン病
高血圧 多発性脳梗塞 便秘症
【生活歴】

農家に嫁いで少しは手伝いはされていたが、主には、専業主婦として家庭内の仕事をしていた。和裁を近所の方から習い、家族の洋服も作るほど手先は器用で趣味は手芸。細かい部分が見えにくくても手の感覚でぬいぐるみ等を編むことができた。

食の問題

- 咀嚼嚥下能力の低下
- 食事姿勢(円背)
- 食事量(嘔吐を伴う)・食事時間
- 口腔内の衛生
- 食具をうまく使えない(拘縮)
- やりたいのにできない不安・ストレス
- 意思を伝える言葉を発することができない



好みの味は選択してもらって
指し示すのはいつもチョコレート味

取り組んだ内容

■ 栄養管理

適正な栄養目標量を算定し、それを充足できるように、食欲・嗜好などを考慮し、食事内容の量・質・形態をコントロールする

■ 共感

声に発することだけでなく行動で示されることを汲み取る
本人に食べたいものを指さして選択してもらう

■ 口腔相談

訪問歯科(施設外医療保険サービス)利用、
口腔衛生会議で食事の問題について
定期的に検討する



■ 自分で食べるためのアプローチ 本人が把持しやすい食具を使用する

食事の際に、介護・看護と連携しながらクッションの活用や車いすの
角度を調整することで、食べやすい姿勢を維持する



結果

亡くなる1か月前は、両腕の拘縮や閉眼により、自身で食べるのが難しくなるが、楽な姿勢を心がけて自食を促すと少し食べる事ができた。日を追うごとに起きている時間が減り、飲み込むことが難しく、口を開くことも減った。最期は本人の喉の渇きを改善するように、口の中を潤す程度に努めた。

終末期ケアが開始された際、息子夫婦は入所当初と同様に「本人の思うようにしてほしい」と希望され、最期まで口から食べる事ができたことに満足された。

考察

私たちは、その方に合った食事環境を作り、一丸となって「口から食べる事」をサポートすることができた。そして、それに応えるようにAさんも最期まで頑張った。表情豊かに笑うAさんから多くのことを学んだ。

年齢的に摂食嚥下障害が生じてしまうことはある意味仕方のないことかもしれない。しかし諦めずに、その方の食べる楽しみ、生きる活力を失うことのないように、今後も管理栄養士として「口から食べる事」にこだわって取り組んでいきたい。